

## 24. 生命科学研究科

( 分析項目Ⅰ 教育活動の状況 ..... 64 )

( 分析項目Ⅱ 教育成果の状況 ..... 65 )

## 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

### 〔判定〕 相応の質にある

### 〔判断理由〕

教育活動の基本的な質を実現している。

### 〔特色ある点〕

- 学生の主体的な学びとグローバル人材の育成を目的に、毎年、学生が主体となって運営するシンポジウムと合宿型セミナーからなる英語による国際セミナー（ISS）を開催している。参加学生自らが、企画・立案、広報活動、会場確保、海外からの招待者との交渉、及びイベント期間中の事務運営まで担当する。共通言語を英語とした口頭発表やポスター発表を通じて、英語による発表・質疑応答の機会を与え、国際的なネットワークの構築と国際経験を促すことで、次世代を担うグローバル人材の育成と学生の主体的学びに大きく貢献した。これらのシンポジウムとセミナーには、多くの学生が参加している。
- 京都大学次世代地球社会リーダー育成プログラム（K.U.PROFILE）の一環として平成21年度年度に開設した「Global Frontier in Life Science」コースを引継ぎ、英語のみで学位を取得するプログラムを提供している。同コースにおいて、生命科学研究経験のある英語を母国語とする教授及び准教授が中心となって、国立台湾大学との間でインターネットを利用した遠隔講義、また米国カリフォルニア大学サンディエゴ校（UCSD）との間での共同遠隔講義を提供してきた。また、同コースの運営にあたっては、生命科学研究科国際教育委員会において、留学生の獲得方法の検討、海外の部局との部局間学生交流協定（MOU）の提携を通して学生の研究派遣等を推進した。
- 学生の孤立化を防ぐとともにコミュニケーションスキルの向上、日本の伝統文化への理解とアイデンティティの確立を目的に、修士課程1回生及び留学生を対象としたスタディツアーを毎年開催している。スタディツアーでは、日帰りの体験学習を盛り込み、参加学生が研究室から離れた環境で互いに時間を共有する機会を提供し、学生生活への溶け込みを促す。また、同ツアーには、教職員も同行し、日常場面では対応できない対話を図っている。
- 福島原発事故による放射線の人体および環境に対する影響を、一般市民が正しく理解し対応できるような知識を養うために、生命科学研究科附属放射線生物研究センターの教員を中心に当地に研究者を派遣し、市民公開講座を実施する事業を展開した。（平成30年度は26回実施）。令和元年内に京都大学の教育拠点を福島県郡山市に設置し、当該事業の更なる拡充を図ろうとしている点は

特筆すべきである。

## 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

〔判定〕 高い質にある

### 〔判断理由〕

現況分析単位の目的に沿った基本的な教育成果が認められる。

学生の論文は、過去3年間では Cell 誌、Nature 誌を含む多くの主要な学術雑誌に投稿されている。また、学生の研究発表では、国内外での研究集会で、数々の奨励賞や優秀賞等を受賞している。

### 〔優れた点〕

- 生命科学研究科では、グローバル人材の育成を目的とした各種プログラムにより、学生の学会発表や主要な学術ジャーナルへの投稿を奨励している。主要な学術ジャーナルへの過去3年間の投稿の事例では、Cell, Current Biology, Development Cell, Genes & Development, Nature Plants, Nature Communications, EMBO J, Cell Reports, Development, eLIFE 等があげられる。また、学生の研究発表に関しては、国内外での研究集会において、数々の奨励賞や優秀賞等を受賞している。